

“未来圏で暮らす”～カランビン・エコビレッジ通信(第1回)

Text by Masaki Yahagi



緑にあふれるエコビレッジの典型的な風景。すべての家は、設計段階から完全オリジナルの「世界でひとつだけのデザイン」。上水はなく、雨水タンク(中水)を利用して、下水はろ過して庭で使用。ビレッジに住む多くの野生動物を保護するための工夫もたくさんある。

[連載する雑誌名]の読者の皆さん、はじめまして。ぼくは、自然ガイドと翻訳の仕事をしてながら、オーストラリアに15年住み、現在39歳になります。人も気候も暖かく、どこかコルい雰囲気満ちたサーフィンで有名な「ゴールドコースト」、その郊外にある「カランビン・エコビレッジ」での暮らし皆さんに紹介したいと思います。ぼく自身、エコビレッジ・コミュニティに住んでいたし、そこに住む友人たちから、さまざまな影響を受けてきたので、その体験を皆さんとシェアしたいと思ったのです。(現在は、近くの森の中の家に移り住んで、あまりお金を使わないスローライフを楽しんでいます)

連載となる予定ですから、「エコビレッジ」での暮らしや生活スタイル、そこに生きる愉快的仲間たちをゆっくりと紹介して行きたいと思います。パーマカルチャー発祥の地であるオーストラリアのエコビレッジならではのアイデアや、こんな生活の工夫もしているのか〜って、楽しく読んで頂けたら幸いです。何より、この国は広大で人口が少なく、残された自然が圧倒的に多い。世界で唯一、大陸を一国で占めている(オーストラリアの面積はインドの2倍以上ある)のに、人口密度は日本の約105分の1(!)なのだから、生活と自然の距離にも差があります。もちろん、この国も大都市は混雑しているけれど、「自然と近いところで生きる」という意志を持てば、それが実現しやすい環境です。

*

まず、「エコビレッジ」とはどのような場所なのか、簡単に説明しましょう。いつの時代だって、人は「**自然・隣人と共存して平和に暮らす**」という理想を持ってきました。(日本にも、宮沢賢治、南方熊楠、武者小路実篤の「新しき村」など) そういった、昔からある「**共同体運動**」の延長線上にあり、最前線で「**地球市民のコミュニティ**」を生活の中で実践する場所がエコビレッジです。日本では、まだ知名度が低ですが、安曇野、房総、富士、藤沢、鈴鹿などで実践されている方もいて、多くの農的生活共同体も含めれば、その数は世界で1万以上になるとも言われています。



星空を楽しむために、街灯は1本もない。家はすべて室内光が漏れない工夫をしているので、天の川がくっきり見える環境だ。

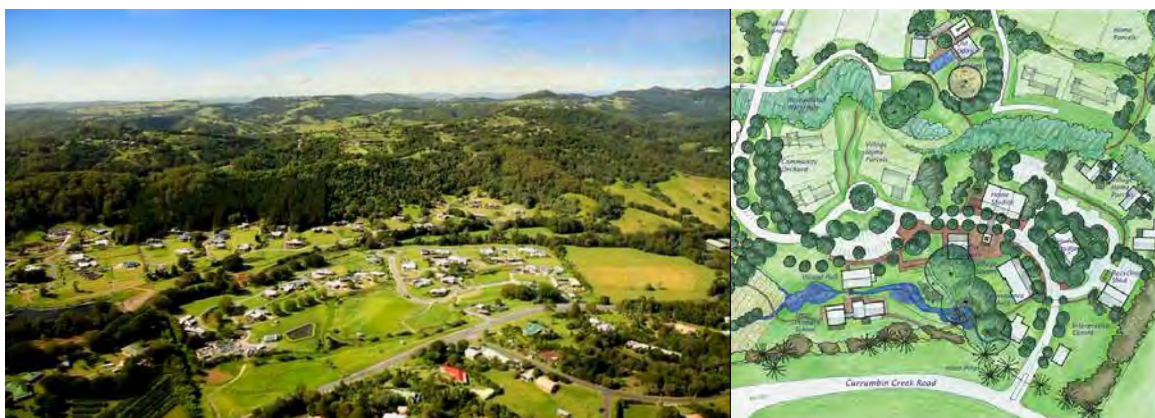
「エコビレッジ」は、例えば、スウェーデン人の、ヘレナ・ノーバグ・ホッジが、映画『ラダックの懐かしい未来』で提唱したように、伝統的価値観を再認識したうえで、新しい価値観や社会システムを作り上げる壮大な試みの一環です。行き過ぎた資本主義に対する反省から、過去に戻るのではなく、理想的な「懐かしい未来」を目指します。緑豊かな美しい環境を守りながら、本来あるべき「人間や社会のあり方」を、みんなが当事者として考えて実践すること、それをシェアして協力しながら共同体を運営すること、その光を世界に広げていくこと、それが「エコビレッジ」の究極の目的だと、ぼくは考えています。

*

「カランビン・エコビレッジ」(ぼくは親しみを込めて「エコピ」と呼んでいる)は、“**The World’s Best Environmental Development**” (FIABCI Prix D’Excellence Award 2008)など、オープンからの10年間でなんと16以上の国内外の賞を受けています。ビレッジの構想段階から、現在まで一貫して「基本的理念」として掲げているスローガン：“**Inspire sustainable living and development practice awareness**” by creating a residential community that exemplifies World’s Best Practice in Ecologically Sustainable Development. ぼくの意識では、「世界で最も素晴らしい、環境に優しい持続可能なコミュニティの見本を示し、持続可能な生活と発展を実践して、世界に向けて発信していくこと」です。

そのための工夫として、以下のような、さまざまなことが実施されています。次号から、その内容をゆっくり紹介して行きたいと思います。

- ビレッジのことは村のみんなの話し合いで決める
- オープンスペース80%、自然保護エリア50%の緑あふれるコミュニティ
- 各家庭でスローライフとパーマカルチャーの実践
- 交流の中心になる、ホール、ライブラリー、プール、ジムなどを含むコミュニティセンター
- 美味しく健康的なオーガニックカフェ&レストラン
- 誰でも開催/参加できる多種多様なイベント
- 太陽光などの自然エネルギー利用
- リサイクルマテリアルを多用した、完全オリジナルデザインの家々(当然、太陽光の角度や風の流れを計算している)
- 生活用水はエコビレッジ内の雨水を利用
- 下水はすべてビレッジ内で浄化/再利用して庭や芝生にまく
- 夜空の星が見えるように光が屋外に漏れないデザイン
- 100匹近い野生のカンガルーと仲良く共生するために、住民は犬猫を飼わない
- 壁やフェンスで土地を区画しない
- 再利用できるものをシェアするためのリサイクルセンターなど



(左) エコビレッジのあるカランビンバレーの美しい風景 (右) カランビン・エコビレッジの構想段階での計画図のひとつ

エコビレッジに集まった人々のバックグラウンドは実に多様で、生き方も暮らし方も自由です。忙しい物質文明から離れて、「**本来あるべき生き方を実践したい**」という、共通した理念のもとに集まってきた200人以上の人が、このコミュニティに集まって仲良く暮らしています。国籍も様々で、日本人も数人暮らしているし、素敵なB&B*もあるので、[連載する雑誌名]の読者の方も、是非気軽に遊びに来て「エコビ体験」をしてほしいと思います。アーティスト、実業家、オーガニックファーマーから、ヒッピー的な自由人まで、「**未来圏で暮らす**」個性豊かな仲間たちと、その生き方も合わせて、（次号から）紹介していきたいと思います。

*B&B=ベッド&ブレイクファーストの略。誰でも泊まれるお洒落で快適な、環境一体型のコテージが丘の上にある。



カランビンエコビレッジ・コミュニティでは毎日のようにイベントや交流があり開放的で、子供たちが育つ場所としても最高の環境だ



エコビレッジが位置するのは、ビーチとレインフォレストの間になる。「オーストラリアのベストビーチ」にも選ばれた、カランビンビーチまで車で10分、「 Gondwana Rainforests」の国立公園(世界遺産登録)までは、車で20分の距離と恵まれた自然環境にある。

*

エコビレッジで暮らすこと、スローライフを実践して見えること、グローバルよりも顔の見えるローカルを大事にすること、すべてがマーケットの中で効率化されてしまった「**行き過ぎた資本主義社会**」から距離を置くことの大切さ。[連載する雑誌名]の読者の皆さんも、同じような思いを持ち、もっと自分らしく心地よく暮らせる場所を探している人が多いと思います。これは、「**人と自然の本来あるべき関係**」を取り戻す方向へのシフトであり、「**現代文明の根本的な問題**」を生活レベルや消費動向から世界を変えることに繋がります。

尊敬する作家の池澤夏樹さんの言葉を紹介します。『お金が人や土地を専門化してゆく。自然について、人生について、トータルな知恵を養うことで幸福が得られるとすれば（ぼくはそう信じているわけだが）、ひとつのことしかできない人やひとつの作物しか育たない土地はとても不利だ。生活には様々な側面があり、仕事とは本来、生活とつながったものだった。（中略）ならば、さまざまな仕事を持っている方が楽しいではないか。ひとつの仕事に専念することで人の心は一種の奇形に陥ってしまうのではないか。』（星野道夫『魔法の言葉』のあとがき 文春文庫）

時代と場所を超えて、同じような知恵と魂を受け継ぐ仲間はたくさんいます。ぼくたちは、争いと強奪に明け暮れた人類の「過去」を繰り返さないためにも、希望を持って「今を生きる」ためにも、健全な「未来」を目指すためにも、仲間を探して、手をつないで、未来の世代へと受け継いで行かなくてはなりません。環境と人類の未来の問題は、まったなしです。

果たして、狭い国家の枠を超えた意識を持つ「地球市民」が、世界の大勢となる日が来るのでしょうか？いや、そうでないと、我々が直面している地球規模の難局も、日本の将来に対する不安も、乗り越えられないのでは・・・？どれだけ本気でみんなと共有できるのでしょうか？自分ひとりの非力を嘆いて、無関心になる前に、自分のまわりにいる家族、友人、コミュニティー、自然環境を大事にして、つながりを広めていきたい。これ以上、あるべき未来を奪わないように・・・今、僕たちができる最大限の努力をしていきたい。そのような思いを胸に、エコビレッジの生活を通して「未来圏の暮らし」を紹介して行きたいと思います。

(写真提供/協力：荒木康介、Currumbin Ecovillage)



(左) ガイド中の筆者。今までになかった本格的な自然ガイドを目指して独立してから10年、その活動は各種メディアでも紹介された。フレーザー島、 Gondwana Rainforests、エコガイド養成講座などを主催。



(右) 筆者と仲の良い友人、荒木康介&フィリッパファミリー。エコビレッジの創設メンバーで、優しく面倒見が良いので、誰からも慕われるビレッジの中心的存在。康介は自然ガイド、フィリッパは日本語も堪能な英語教師。

文・写真 | 谷萩真樹 | Masaki Yahagi

1976年、東京生まれ。オーストラリア国立大学(環境サイエンス/国立公園管理)を卒業後、本格的エコツアー「ナチュラ・エコツアーズ」を立ち上げて、フレーザー島や環境教育などで幅広く活躍。昨年より、荒木康介氏(写真)と共に「アースコネクション」を通して、エコビレッジを拠点にした、今までにないローカライズ&滞在型ツアーを開始。自宅家事・子育て・家庭菜園をしながら、翻訳もしている。同居家族は、妻と1歳の息子。座右の銘：'Think Globally, Act Locally'を日々、実践すること。



エコビレッジに滞在してみたい、そこを拠点にして素敵な旅をしたい、スローライフやパーマカルチャーを体験したい、面白い友人を紹介してほしい、などなど・・・興味のある方は、是非ご連絡をください。従来のツアーの概念とは異なり、「エコビレッジのゲスト」として親友をもてなすように、ローカルの友人とのさまざまな出会い、美しい秘境への旅へとご案内します。

✉ naturepeace@zoho.com URL: earthconnection.jp

“未来圏で暮らす”～カランビン・エコビレッジ通信(第2回)

Text by Masaki Yahagi



僕がバルバあちゃんと暮らしていたエコビレッジの家の正面入り口。エコビレッジではすべての家が、世界に唯一の完全オリジナルだ。

オーストラリアに移住して15年が経ちました。数回の豪州放浪旅行に出かけた後、日本人初の国立公園パークレンジャーになることを夢見た20代の若者でした。その後、自然ガイドと翻訳を仕事にするようになりました。初めてオーストラリアを旅した時に感じた(20年も前の話ですが・・・)、あの圧倒的な開放感とワクワク感、「人も自然もなんて多様性にあふれて快適なのだろう!」と、**異文化の刺激**に、そして**果てしなく広がる大自然**に夢中になりました。何気なく訪れたオーストラリアとの相性は抜群で(それは、まるで初めてビートルズやクイーンを聴いた時のように衝撃的に)、その後の僕の人生の航路を大きく変えることになりました。

オーストラリアに住む日本人の数は年々増加して、現在では8万人以上(在留邦人が世界で3番目に多い外国)になりました。英語圏で治安が良く、自然豊かで土地が広く、多様性を受け入れるユルいお国柄なので、(英語が苦手な日本人でも)暮らしやすい条件が揃っています。昔は、有色人種に差別的な「白豪主義」の国だったのですが、1970年代に「**マルチカルチャリズム(多文化主義)**」へ変貌を遂げたこの国は、多様な人種と異なる文化を大事にする「移民国家」の成功例となりました。ぼくにとっても、全く異なる価値観の人々とコミュニケーションを取る中で、自分の世界観が別人のように広がっていくことが、何事にも替えがたい喜びでした。

*

先月号で述べたように、今回から、カランビン・エコビレッジの「**未来圏に暮らす**」友人たちのユニークな暮らし方、自分らしく幸せに生きるための創意工夫を、読者の皆さんとシェアしていきたいと思います。エコビレッジ・コミュニティの人々は、ほぼ例外なくオープンで優しく、知的で好奇心旺盛です。(そういう仲間を求めてエコビレッジにやってきたのだから当然かもしれませんが・・・)

エコビレッジで暮らすには、まず自分の家を建てることから始まります。すでに地球上に存在する家をコピーすることは許されません。存在するのは、「世界に唯一」の**完全なオリジナルハウス**のみ。太陽の向き、風の流れ、建築素材、自然エネルギー、雨水利用など・・・その土地と環境に最もふさわしい「**夢の家**」を、そこに住む人が、何年もかけて設計から創造するのです。(もちろん苦勞も多いけれど・・・その価値は計り知れません) だから、エコビレッジの100軒以上の家は、すべて創造性にあふれて外から見ているだけでとても楽しいし、新しい友人ができて中に招待されると、どのような工夫があるのか、ワクワク感がたまりません。

その中でも、僕が住んでいた家は、際立ってユニークな設計です。下の写真のように、モンゴルの移動式住居＝パオ(包)をモチーフに、円形の建物を連絡橋でつないでいるのです。ぼくの大切な友人でもある、設計者の VAL(バル)と DEE(ディー)は親子揃ってアーティスト。まるで妖精が住んでいるような雰囲気の家で、建築材はリサイクル素材を70%使い、家の中は手造りアートでいっぱい、ガーデンは花と野菜がたくさん育っています。最後に完成した「特製のお風呂」からは星空だって見える(!)設計です。また、軒下には野生のカンガルーがよく休憩をしています。土地の購入と設計開始から、実際に住み始めるまでが5年。2人がエコビレッジに住み始めてから約5年になります。いつも改良を重ねて、より素晴らしい家になっています。



ぼくと妻は、この通称[ヤーツ/Yurts]で、明るいバルばあちゃんと一緒に家族のように暮らしていた。庭には毎日カンガルーが来る。

ぼくと妻がこの家に住むきっかけになったのが、エコビレッジのアイドルばあちゃん「**バレリー(通称:バル)**」(80)との出会いです。底抜けに明るくおしゃべりで、誰に対しても寛大でオープン、度胸満点の彼女は「エコビの人気者」。ブリスベンでフラワーショップを経営していた彼女は、現役時代、オーストラリアを代表するフローリストでした。その関係から、日本にもフラワーデザイナーや生け花の友人が多く、10度も来日しています。驚くべきエネルギーと情熱の高さ、その優しさと寛大さのため、誰からも好かれる存在です。

バルはコミュニティと友人を何よりも大事にしています。フォトジャーナリストだった旦那さんと一緒に住む予定だったのですが、「夢の家」が完成する前に、旦那さんは他界してしまいました。そのバルにとって、**ビレッジの仲間は家族のような存在**です。僕を訪ねてきた友人に対しても、旧来の友人であるかのように優しく、ご馳走を振る舞い、家に泊めてくれます。また、近所の子供が悪いことをすれば、愛情を持って本気でしっかりと叱ります。子供たちは、本気で怒られることにより、なにが迷惑をかけることかを理解できるし、バルが大好きだからまた遊びにきます。信頼されているので、赤ん坊や子どもの面倒を頼む人も多いのです。こういう年配者の存在が「**地域コミュニティ**」では、ものすごく重要な役割をします。

ここ数年は、自然から採れる珍しい果実を使って、何十種類もの手造りジャムを作っています。フルーツ集めから自分で行い、おそらく、読者の皆さんも体験したことのない美味しさ(!)のジャムばかり。しかも、毎年コンテストに参加して、たくさんの賞をもらってきます。特に「**ローゼルジャム**」(ローゼル:西アフリカ原産のワイルドハイビスカスの種で、別名「洛神花」という生薬になるほど健康に良い)は、バル自身が庭で自家栽培した自慢の作品。そんな貴重なジャムだって、みんなに気前良くプレゼントしています。ビレッジの誰かが他界すれば、みんなから少額の寄付を募り、丹精込めた見事なフラワーブーケを造って(かつてオーストラリア全国で1位になったほどの腕前で、まさに職人の技)、村の友人を暖かく天国へ見送ります。



いつも明るいバルは、いつも感動することや向上心を忘れない。バルの作る手造りジャムは20種類以上で、それ以上に受賞経歴が多い。

みんなから必要とされるバルは、「**幸せの循環**」を自分で生み出しているのです。人間関係が希薄になる一方の現代社会で、なかなか見られなくなってしまった貴重な存在でしょう。80歳の彼女はまさに「**生涯現役**」であり(実際、病気もないし、病院にも行かない、何より目が輝いている)、ビレッジにかけがえのない存在となっています。「お金を稼ぐ」と「仕事をする」ことは別物です。仕事とは人の役に立つこと、自分が楽しいと思える適材適所を探し、良いエネルギーを生み出すことです。つまり、生きている限り「仕事」に終わりはないはず。ぼくは、彼女と一緒に暮らして、そういった大事なことを体験的に学ぶことができました。

結局のところ、人は「**幸せになるため**」に生きているのです。ぼく達が、エコビレッジに集まる理由も、旅に出かける理由も同じです。どんなに素晴らしい絶景や遺産を見ても、その感動をシェアできる人や、そこに住む人々や文化との、心触れ合う交流なしには、表面的なままで終わってしまうでしょう。人が冒険や旅をするのは、「**生きている実感**」を得るためであり、「**多様な価値観・人々・自然との出会い**」を通して、あらゆる命が関わり合いながら、同じ世界を共有していることを知るためではないでしょうか？

アラスカの自然と野生動物、そこに生きる人々をテーマに撮影を続けた写真家の星野道夫さんはこう言っていました。「旅をしていつも思うのは、その風景を自分のものにするために、そこで誰かに出合わなければならないということだ。もしそうでなければ、風景はただ映画のスクリーンを眺めているように、決して自分自身と本当の言葉を交わさない。そして旅をすればするほど、世界はただ狭くなっていくだろう。けれども、誰かと出会い、その人間を好きになったとき、風景は初めて広がりさと深さを持つてくる。」(星野道夫『Switch1997年1月号』)

*

物質に満たされているのが「**幸せ**」ではないし、物欲に踊らされているのが「**豊かさ**」でもない。海外に住む日本人として、物質文明を極めた感のある、日本社会への思いや憂いは深くなる一方です。世界の「**住みやすい国**」のトップクラスに入るとも評価されるオーストラリアでも、暮らしてみればいろいろ問題はあります。15年も住んでみて、全面的に肯定するつもりはありません。もともと、人間の暮らすところに完全なる社会は存在しないのです。しかし、ぼくの根底には、「今の日本は、あるべき姿から掛け離れている」という思いが子供のころからあって、それが少年期からの見知らぬ海外へ憧れになりました。

我々は、人類が経験のしたことのない戦争をしています。対テロ戦争のことではありません。それは、行き過ぎた強欲資本主義と物質文明が、「**未来を奪う戦争**」なのです。現在の繁栄は、途上国の人々の貧困格差を前提に、我々を生かしてくれる地球資源を際限なく使い、未来の人が享受すべき美しい世界を侵略して成り立ちます。ぼく達を生かしてくれる自然環境を破壊し、一時的な金を儲けるという行為がいかに愚かであるか？ 残念ながら、それを自分のことと受け止めて本気で行動している人はまだまだ少数派です。毎日、広告やテレビに映る人々は、繰り返し、無駄な消費を奨励します。でも、エコビレッジの人々は、物欲に踊らされている時代を超えた、「**未来圏の暮らし**」を実践する努力をしています。ぼくは、海外暮らしの日本人として、オーストラリアに住む**異国の日本人**ならではの視点を通して、この連載を続けていきたいと思えます。

(写真提供/協力：長野由美子、Valerie Sier)

文・写真 | 谷萩真樹 | Masaki Yahagi

1976年、東京生まれ。オーストラリア国立大学(環境サイエンス/国立公園管理)を卒業後、本格的エコツアー「ナチュラ・エコツアーズ」を立ち上げて、フレーザー島や環境教育などで幅広く活躍。昨年より、荒木康介氏と共に「アースコネクション」を通して、エコビレッジを拠点にした、今までにないローカライズ&滞在型ツアーを開始。自宅で家事・子育て・家庭菜園をしながら、翻訳もしている。同居家族は、妻と1歳の息子。座右の銘：'Think Globally, Act Locally'を日々、実践すること。



エコビレッジに滞在してみたい、そこを拠点にして素敵な旅をしたい、スローライフやパーマカルチャーを体験したい、面白い友人を紹介してほしい、などなど・興味のある方は、是非ご連絡をください。従来のツアーの概念とは異なり、「エコビレッジのゲスト」として親友をもてなすように、ローカルの友人とのさまざまな出会い、美しい秘境への旅へのご案内します

✉ naturapeace@zoho.com URL: earthconnection.jp

第3回目以降の構想について（12か月ほどの連載として想定中）

テーマ：エコビレッジに住む人々の生き方、暮らし方や、ユニークなエコハウスを、海外在住15年、自然ガイド経験が長い筆者ならではの視点から紹介していく。

1. エコビレッジ・コミュニティの中心的存在の荒木康介さん（自然ガイド、オーガニックファーマー）と、オーガニックライフ&非暴力コミュニティを推進するフィリッパの夫妻
2. インドの歌う瞑想、キルタンを歌うジャズシンガーのアリッサ
3. 古タイヤで家を作りながら(建設中)、家庭菜園、ヤギのミルク搾る、サム
4. ドレスメーカーでありながら芸術的な家具を作る建具師、マギー
5. エコビレッジの入り口でカフェを営むムレッタと、村内で植林活動をするリーダー、アレックスのカップル。彼らの家は、ストローベールハウス
6. 地元で人気上昇中の、昔ながらの本格的な有機味噌と米麴造り（およびワークショップを主催）をする、翻訳家および鍼灸師の大貴智子さん

上記の例以外にも、さまざまなアーティスト、ナチュロパス、ヨーガの先生、マッサージ師、オーガニックファーマーなど、興味深い友人がたくさん住んでいます。

※内容・構成・文章スタイル等は、御社の編集方針に全面的に沿わせて頂きます。正直なところ、執筆経験が少ないので、ご指導やアドバイスを頂けたら幸いです。

谷萩真樹（39） | Masaki Yahagi |

連絡先：masakiyahagi@hotmail.com | +61 422 797 958

略歴：

- 東京生まれ、日本の環境保護団体で働いていた後、25歳で豪州に留学
- オーストラリア国立大学、環境サイエンス学科卒業（2002-2005）
（大学より、環境貢献賞 Environmental Achievement Award 受賞、在学中の2002より自然ガイドを開始）
- 自身で始めた会社、ナチュラ・エコツアーズで自然ガイド（2005-2013）
（留学ジャーナルや地球の歩き方などの紙面で紹介される、エコガイド養成講座主催、フレーザー島での講演会、フレーザー島ツアーがテレビなどで特集される、TBS 世界遺産などのテレビ取材協力など、2013年に怪我でガイド活動を一時休止）
- 最先端医療などに関する翻訳を開始（2014-現在）
- 友人の立ち上げた環境教育団体「ジュエルビートルズ」理事（2014-現在）
<http://10beee.com/>
- スローライフ&滞在型ツアーの「アースコネクション」をエコビレッジの友人と共に開始（2015-現在）
<http://earthconnection.jp/>
- 池澤夏樹のレビュー（書評）コンテスト「愛と情熱が満載のレビュー賞」受賞(2015) <http://www.voyager.co.jp/impala/review2015/index.html>